

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.65  
5ヶ月ぶりの  
復職初日

「おはよう。古ちゃん。今日も一ぱ〜ツ！ オロナミンCってか。」同僚の山下が上機嫌に声をかける。

「おはようございます。」中堅の玉木も自転車で追い抜いていく。

「古川さん。おはようございます。」衛生委員の志波も声をかけてくれる。

こんな幸せな時はない。当たり前の日が当たり前過ぎていく時の流れ。健康が当たり前の事と錯覚していた頃には感じ取ることができなかった。今が最も幸せを感じる瞬間かもしれない。

私は银杏舞い散る社内路を大地の感触を確かめるようにいつもよりゆっくりと更衣室に向かう。

朝の朝礼で部門長から本日の工程表が配られ皆でラジオ体操を行った後、各部署に分散していく。そして、今日の仕事が始まった。嬉しいことに自分に与えられた仕事は休職する前とほぼ同じ内容だった。

「古ちゃん。大丈夫か？」隣で精密機器に向きあう山下が自分の手元から目を離さないで気使っている。

「ブランクはあるけど、何とかやる。」私の声が、既に動き始めた機械音の中にかき消されていく。緊張感の中で一つ一つ作業手順を確認しながら作業を進める。が、やはり肺癌との闘病のために休んだ5ヶ月間のブランクは大きすぎる。以前なら何も考えず、無意識のうちに手先が動いていたものが、考えないと次の動作に移れない。動作の後、何か違うと感じる。よくよく考えてプロセスが違っていたことを思い出す。

以前なら若手に「こんなこと基本やで。身体で覚えろ！」と手厳しく教えていた内容を次から次へと間違える。以前なら30分で出来ていた作業が午前中いっぱいかかった。

「古ちゃん。思っていたよりちゃんと出来てるじゃねーかよ。」山下が微笑みかける。

「あかんわ。思っていたよりブランクが大きすぎる。」山下の気遣い分かる分、自分の不甲斐なさが情けない。こうして皆の暖かい心配りに感謝しながらも癌治療開始後、職場復帰第1日目が終わった。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一